

シリーズ

阿久比を歩く ⑧



あぐいぶらり旅

施設かいわいを行く(スポーツ村)



陸上競技場トラックゴール付近

阿久比スポーツ村周辺を回ることにした。丘陵地にあるスポーツ村は、野球場、陸上競技場、トレーニング室を備え、「緑の中で、おもいっきりスポーツを楽しもう」をコンセプトにした町のスポーツ施設である。今年の四月からはクラブハウスの二階に子育て総合支援センターもオープンして連日、子どもの笑い声が響く。

阿久比スポーツ村周辺を回ることにした。

丘陵地にあるスポーツ村は、野球場、陸上競技場、トレーニング室を備え、「緑の中で、おもいっきりスポーツを楽しもう」をコンセプトにした町のスポーツ施設である。

球場へ足を運ぶ。夏の全国高校野球選手権愛知大会が開かれるグラウンドでは、大会を控えた球児たちが練習に汗を流す。職員の許可を得て、スタンドを歩くと、外野スタンド一面には芝生が敷き詰められる。スコアボードを通り過ぎ、バックスクリーン裏倉庫の窓越しに、白字で「オリ」と記された緑色のプレートを発見。

かつてこの球場は中日ドラゴンズの二軍のホームグラウンドとして、プロ野球ウエスタンリーグの試合が行われていたこともある。

「一部しか見えていないプレートは『オリックス』です。イチロー選手がオリックス時代に阿久比でプレーしたらいいですよ。当時は登録選手名が『鈴木』で『鈴木』のネームプレートも残っているみたいですよ」と友人は得意げに話す。「何でそんなこと知ってるの?」「ここで勤めていた知り合いに聞いたことがあります。『新庄』もあるらしいですよ」。



野球場スコアボード裏

縁起の良い野球場。ここで練習している球児たちも、いずれは大リーガーになるのかもしれない。

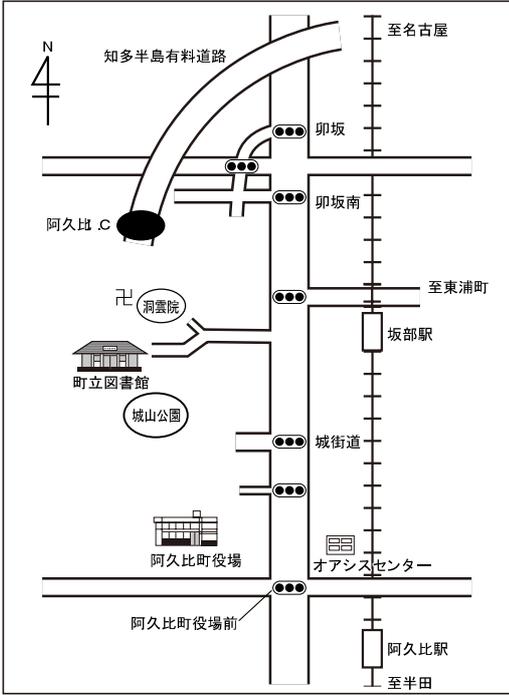
野球場から陸上競技場に場所を移す。トラックは一周四百メートルで六コース。サッカーの試合ができるフィールドは緑の芝生が鮮やか。

二人でトラックを歩く。途中までずっとゆっくり歩いてきたが、第四コーナーを過ぎて走り出す。私はスピードを上げていけない。友人はゴール付近でフィニッシュポーズを取り、後ろを振り返り向き、白い歯を見せる。「学生のころ陸上部でした。ついくせで」「そうなの・・・」。

へんなどころで負けず嫌いな私は先着されたことに悔しい気持ちになる。秋にはクラブハウス内にトレーニング室が移設される。メタボが気になる私としては、新トレーニング室に通って体を鍛え直し、「いつかはリベンジを」と思いながらスポーツ村を後にした。

シリーズ

阿久比を歩く ⑧1



本を読む子どもたち

昭和五十八年七月の開館以来、多くの人に利用される、情報発信の基地「町立図書館かいわいにぶらり出かけた。」
—徳川家康の生母於大の方は家康を生んだ後、天文十六（一五四七）年坂部城主久松俊勝と再婚。政略結婚のため幼い息子と離ればなれとなる。家康は桶狭間の戦いを控えた永祿三（一五六〇）年、於大の方に会うため坂部城に立ち寄りたと言われる。—

施設かいわいを行く（町立図書館）

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

歴史の舞台となった坂部城跡の静かな場所に図書館は建つ。

坂部城跡の石碑が残る城山公園に立ち寄る。「シャァー、シャァー。シャカ、シャカ」夏の風物詩、セミの鳴き声がにぎやか。タモで木に止まるセミを取る親子の姿がほほ笑ましい。公園の西から図書館の玄関に回る。

図書館の屋根は城跡にちなみ、城を連想させるような瓦ぶき。昭和六十二年には斜面を生かした小規模図書館として、日本図書館協会建築賞「特別賞」にも輝き、落ち着いた感じのデザインである。

図書館に一歩足を踏み入れる。エアコンの入った館内は実に気持ちがいい。一度に汗が引く。
「暑い夏、外からエアコンの効いた場所に入ったときは、「きたあー」って感じですよ。ちまたで、はやりギャグを交えて友人が話し掛けてくる。私は人差し指を立て、口元に近づけて「しいー」と注意を促す。図書館では大きな声でしゃべることとは厳禁。友人はそのことに気がき

き、



瓦ぶき屋根の図書館

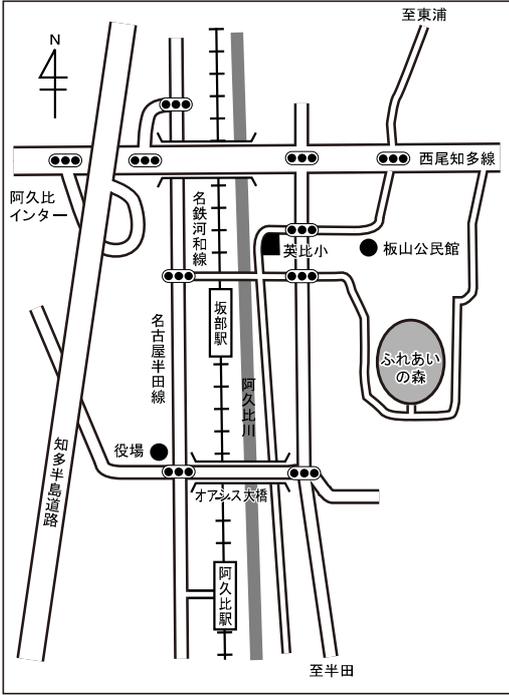
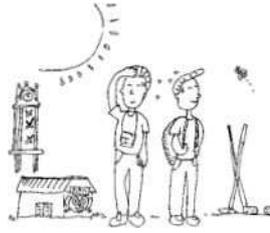
それからは小声でしゃべるようになる。

絵本や子ども向けの本が並ぶ児童室は、夏休みで子どもたちがいっぱい。読書が自由にできる閲覧室では大人たちが静かに本を読む。窓の外を眺めると公園や竹やぶの緑が取り囲む。雑音の多い社会で、日々忙しく生活を送る人にとっては、ゆつくりと自分の時間が過ごせる「最適空間」だ。

図書館を出る。「次郎物語」の主人公の勇氣ある行動に感動を覚えたし「黒い雨」を読み終えた後の切なさは何とも言えなかったなあ。ところで君の思い出に残る本は？」と友人に問い掛ける。「恐竜が出てきて、あれですよ。えっと・・・。書名を度忘れしました。「どこがおもしろかったの?」「・・・」。「本当に読んだの?」「感想文を書いた覚えがありますから確かに読みました。友人の額から大量の汗が流れていた。

シリーズ

阿久比を歩く ⑧2



ホテル養殖場

夏の日の午後、ふれあいの森周辺にぶらり旅に出掛けた。ふれあいの森は、青空の下、子どもから大人まで一日ゆっくりと過ごせる、「憩いの場」である。管理棟を通り過ぎると、高さ七メートルのシンボルモニュメントの時計台が見える。午前十時、正午、午後三時、午後五時になると、からくり時計が作動する。時計台の中で妖精の人形が回り、メルヘンチックな世界を奏

あぐいぶらり旅 施設かいわいを行く(ふれあいの森)

でる。午後三時、『恋は水色』の曲とともにからくりが動き出した。立ち止まってしばらく眺める。ふれあいの森の中央は、芝生広場が広がる。友人と二人で芝生の上で寝転がる。開放感いっぱい気持ちがいい。目に入るのは青い空と入道雲。子どもたちはボール遊びを楽しむ。クマゼミの鳴き声が絶好調。「松尾芭蕉の句で、へ何とか 何とか 蝉の声」があつたよね。上の句なんだっけ?と友人に尋ねる。「へ古池や」じゃなかったですかね?。「えっ...。芭蕉の句には違いないけどそれは違うな」。芝生のチクチク感が気になってきたので、上の句を思い出せないまま場所を変える。

デイキャンプ場では、炊事場とバーベキューが行える炉が設けてある。「今度家族でバーベキューやりましょうよ」「君はいつも調子いいこと言うけど、実際に企画しないかなあ」と私が言うと、「企画しますよ。指切りげんまんしましょう

よ」。友人と指切りをして約束をしたが、いつの日になることやら。まだまだふれあいの森敷地内は広い。子どもたちの遊ぶ遊具も多い。全長五四・八メートルのローラー滑り台。童心に返り滑ってみる。大きな声を出して滑ってきたので利用客が私たちに注目。少し恥ずかしい思いをしたが、心地よい風を感じることにできた。

ホテル飛びかう住みよい環境づくりを目指して、調査研究を行うための「ホテル養殖場」もふれあいの森の中にある。毎年六月下旬には観察会を開いている。今年も観察会の後に、多くの卵が発見されたことを担当者に聞いた。来年もホテルの光が私たちを癒してくれるだろう。

セミの声は鳴き止まない。友人が突然「へ閑さや 岩にしみ入る 蝉の声」だと叫ぶ。「そうだよ」。どの奥に刺さった、魚の小骨が取れたときのよう気が分が晴れる。パターゴルフを楽しむ家族を横目に、ふれあいの森を後にした。

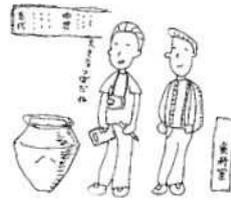
まだまだふれあいの森敷地内は広い。子どもたちの遊ぶ遊具も多い。全長五四・八メートルのローラー滑り台。童心に返り滑ってみる。大きな声を出して滑ってきたので利用客が私たちに注目。少し恥ずかしい思いをしたが、心地よい風を感じることにできた。



シンボルモニュメントの時計台

シリーズ

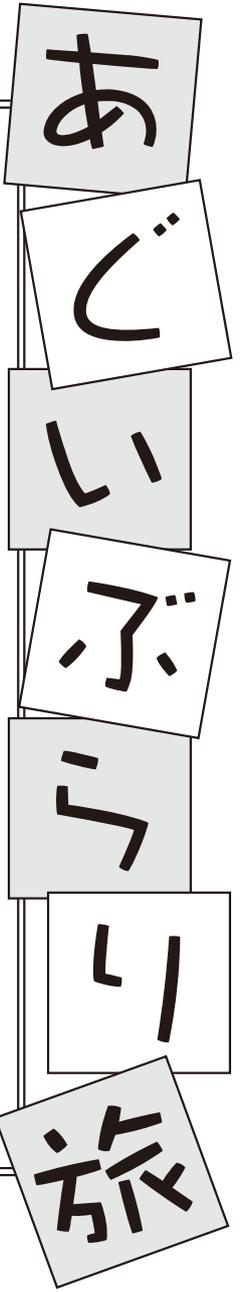
阿久比を歩く ⑧③



遺跡や古窯から出土したやじりやつぼが並ぶ資料室

町立中央公民館がいわいを歩いた。役場の北側に本館と南館が並ぶ。本館の周りをぐるりと回る。東側の壁際は、花壇に植えられたゴーヤのつるが伸び、緑のカーテンを作る。コンクリートの白い壁に緑が映え、美しい景観を醸し出す。中央公民館本館は昭和五十二年九月に完成。三階建てで、趣味やサークルなど各種の活動を幅広く行える場所、人と人をつなぐ町の生涯学

施設かいわいを行く(中央公民館)



習の拠点である。南側入口から本館の中に入る。夏休みに開放される町営プールでの遊びを終えて、親の迎えを待つ子どもたちが、ロビーのいすでくつろぐ。友人が、真っ黒に日焼けした男の子に声を掛ける。プールで毎日遊ぶの。オリンピックで金メダルを取った北島康介知ってるか? 『超気持ちいい』の人でしょ。子どもたちとの会話が弾む。この夏はどこへ行っても北京オリンピックの話で盛り上がる。公民館の中央には中庭が造られる。すらりと孟宗竹が群生し、地面には砂利が敷き詰められ、おしやれな日本庭園が演出されている。庭を見て抹茶でも飲みながら一服といきたいところだが、外は暑いので、クーラーの利いたロビーから庭園を満喫。二階へと足を運ぶ。資料室に町の遺跡や古窯から出土したやじりやつぼが飾られる。小学五年生のとき、歴史クラブに一年在籍し、考古学者を夢見た私? にとっては興味深いも

のがずらりと並ぶ。「このやじりさあ...」。得意になって力説したが、隣を振り向くと友人は携帯電話のメールを見てニヤニヤ。古代ロマンにはまったく興味がなさそう。公民館では、かつて結婚披露宴も行われ、三組が宴を挙げた。三階大会議室にある大きな「びょうぶ」は、そのときの名残りでもある。新婚ホヤホヤでもある友人に「もう一度ここで披露宴やたらどう」と勧める。「今の幸せを、もう一度みんなに見てもらいたいです。冗談ですけどね...」。美人の奥さんをもらった男の言葉には自信と深みがある。公民館を出る。涼を求めて町営プールをのぞく。プールでは子どもたちが元氣だ。「北島のまねかなあ。平泳ぎする子が多いよね」と友人に話し掛けたが返事がない。またメールを見てニヤニヤ。しばらく新婚の友人とは会話がかみ合わないが旅が続くかもしれない。



町営プールで元気に遊ぶ子どもたち

シリーズ

阿久比を歩く ⑧4



エスペランス丸山入口
 エスペランス丸山（阿久比町勤労福祉センター）かいわいをぶらり巡った。
 エスペランス丸山は平成元年十二月に完成。"エスペランス"とはフランス語で「希望」を意味する。勤労者の余暇活動の拠点、町民のコミュニケーションの場として、「希望」にみちたふれあいの空間となるよう願いを込めて、施設名に「エスペランス」とネーミングされている。

あぐいぶらり旅

施設かいわいを行く（エスペランス丸山）

一階には成人式などが開かれる「多目的ホール」、二階には円形テールブルが備わった会議室や和室の集会所などがある。

施設内はちよつとした美術館でもある。ロビーには平山郁夫氏がシルクロードを描いた作品「流沙の道」の壁画が飾られ、そのほかにも北村西望氏や池田満寿夫氏などの美術作品が所狭しと飾られる。

「これから季節は秋。エスペランス丸山で美術品を眺めながら、芸術の秋を満喫してはどうでしょうかねえ」と友人が話し掛ける。「いい考えだね。奥さんと弁当持ちで来て、芸術に浸った後は、丸山公園のベンチで仲良くおにぎりでも食べたらいかがう？」「お金も掛からないし、そうします」。即答で友人の言葉が返ってきた。

武道場が隣接する。今は誰もいないが、剣士を志す子どもたちが剣道の練習に汗を流す場所だ。その奥にテニスコートが二面ある。「ポーン。ポーン」とボールの音が響く。



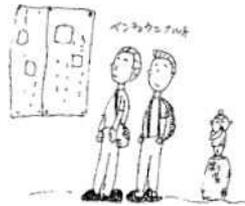
丸山公園に並ぶ昔話の石像

コートでは女子高校生たちがテニスの練習に励む。浅黒く日焼けした顔からときどきのぞかせる白い歯がとてもまぶしい。躍動する動きは青春真つ盛りだ。フェンス越しに高生姿を見ながら、高校生時代の少し甘酸っぱい思い出を懐かしむ「何ニヤニヤしてるんですか」と友人に問い詰められる。「いや、別に」。

「？・・・」。現実に戻り、丸山公園へと進む。木陰は秋の風を感じ涼しい。公園内には『浦島太郎』はじめ昔話を題材とした石像が並ぶ。ほのぼのとしたあたたかみを感じる。

しばらく散策して「そろそろ帰ろうか」と友人に声を掛けると「あのベンチにしようかなあ・・・」。子どもたちがおやつを食べてくつろぐベンチを見て、友人が独り言をしゃべっていた。

シリーズ 阿久比を歩く ⑧5



支援センターで仲間とくつろぐ高齢者
 今回はオアシスセンター周辺をぶらり歩いた。
 役場前の信号を渡り、殿越川に沿って階段を下りる。「親水公園」にたどり着く。公園には川の中に入っ
 て水遊びが出来る場所が設けてある。彼岸も近く、川の中に足を入れるには少し水が冷たい。アメンボたちだけが元気に水面を飛び跳ねる。
 川の中に造られた石の足場を飛び越えながら川を渡り、オアシスセン

あぐいぶらり旅 施設かいわいを行く(オアシスセンター)

ターへと向かう。
 オアシスセンターは昭和六十三年に完成。保健センターと高齢者生きがい活動施設を併設した施設だ。
 センター内は土足厳禁。スリッパに履き替えロビーへと進む。ロビーに手を添えて、にこやかにほほ笑む少女(北村西望氏作『笑う少女』の銅像)が私たちを出迎えてくれる。
 一階と二階が保健センター。健康日本21あぐい計画「めざせ!ハツパイライフあぐい21」の下、町民の健康づくりを推進するために、健康相談や健康診断などの保健サービスを行っている。
 廊下には、普段保健センターで行われている活動内容などが展示されている。手作りで、心のこもった素敵な作品に仕上がっている。幼児健診の写真に写る母子の表情は自然で、とてもほほましい。
 「子どもがかわいいのは、小学生に上がる前までだなあ。」「そうなんですか」と友人が興味深げに、私に聞いてくる。「君も子どもができれば

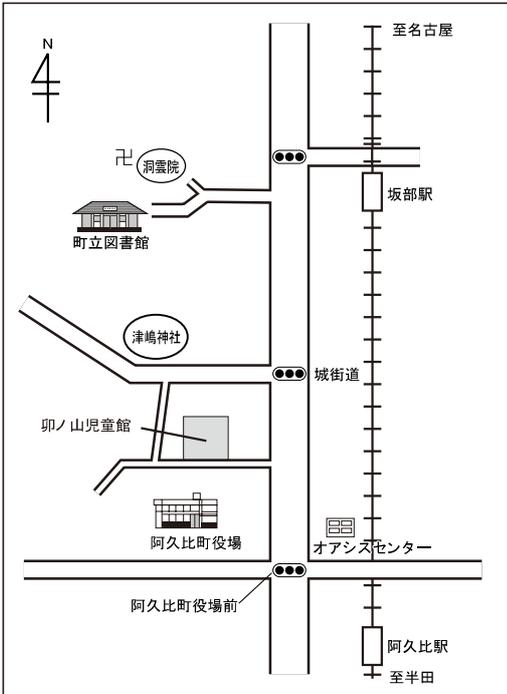
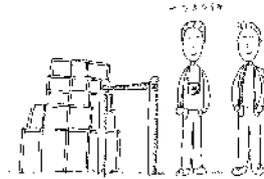
分かると思うけど、母親にしかかれると幼いときは僕にあまえてきたものだったけど、今なんか四年生の娘は近寄ってもこないからね。一時間も経たないうちに「お母さん、お母さん」だよ。「近寄らない別の理由があるんじゃないですか?」
 三階は「生きがい活動支援センター(デイサービス)」と「シルバー人材センター」が並ぶ。生きがい活動支援センターをのぞいてみると、おばあちゃんたちが遊びにきていたボランティアの方に「お茶でも飲みながらおばあちゃんたちと話をしたらどうですか」と勧められる。
 言葉にあまえて、お茶を「ごちそうになる。もうすぐ九十七歳になるといふ新美政子さんは「ここでみんなと話して、少しだけ晩酌をするのが健康の秘けつかなあ」と笑顔で話す。
 帰り際にロビーで再び見た「笑う少女」と、先ほど出会ったおばあちゃんたちは同じ表情を浮かべていた。



『笑う少女』の銅像

シリーズ

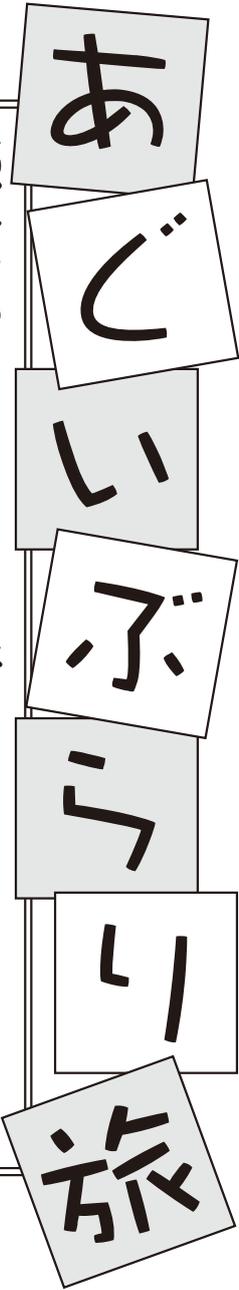
阿久比を歩く ⑧6



児童館で遊ぶ子ども

秋の日の午後、卯ノ山児童館周辺にぶらり出掛けた。役場から県道名古屋半田線を少し北に歩き、西に曲がり細い道に入ると、すぐに卯ノ山児童館が見える。児童館の敷地に入る前の掲示板で面白いものを発見。十月四日に開催される「ふれあいハイク」のポスターの中に私たち二人の姿がある。一年前の「ふれあいマップを歩く」シリーズで、ふれあいハイクに参加

施設かいわいを行く(卯ノ山児童館)



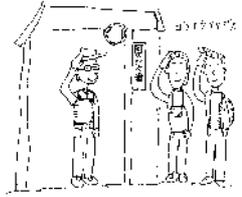
した際に撮られた写真がポスターに使用されている。笑顔で歩く二人の姿は実にリリしい。「このポスター効果もあって今年の参加者は倍増じゃないですかね。記念にこのポスターもらおうかな」と友人が言う。もらってどうするの? 「いつもこんな笑顔で『ぶらり旅』を続けていることを妻に見せます。それはいいことかもしれないね・・・」。児童館は昭和五十一年三月に完成。子どもたちが遊具などを使い、自由に遊ぶことができる場所だ。週に三回「あそびひろば」が催され、保護者には、子どもを遊ばせながら子育ての情報交換の場にもなっている。友人も小学生のころに遊んだことがあるらしく、当時を懐かしむ。幼い純粋な気持ちを持った多くの子どもたちがこの場所から巣立っている。児童館の中をのぞく。三人の男の子たちが無邪気に遊ぶ。「おじさんたち何しに来たの」と聞かれる。「このおじさんが昔ここで



児童館正面玄関

遊んだことがあるって言うから、ちょっと寄ってみただよ。ところで君たち宿題終わったか? 私が見ると「まだ。ここで遊んで、ご飯食べたらやるよ」。子どもらしい答えが返ってくる。児童館を後にして、先ごろ卯之山地区で虫供養が行われた津嶋神社を訪ねる。小屋が作られ、鉦や太鼓が鳴り響き、多くの人でにぎわった供養の日とは違い、境内は静かだ。虫供養で建てられた大塔婆はそのまま残されている。大塔婆を前にして友人がぼそりと言う。「子どもたちに『おじさん』と呼ばれ少しショックですね。児童館を巣立つてから二十年もたつのか。」「児童館で遊んだから今の君があるんだと思うよ。」「そうですね。でも、『おじさん?』か。まあいいか『おじさん』で。」

シリーズ 阿久比を歩く ⑧7



駅前のシンボルモニュメント「明日へ」

阿久比交番の周りをぶらり歩くことにした。役場を出発して阿久比駅に向かう時間は午後四時少し過ぎ。下校する学生の姿が目立つ。駅を目指す高校生たちと同じ方向に歩く。大きな躍動感と上昇する力を表現したモニュメント「明日へ」が駅前ロータリーを引き立てる。平成十年三月に阿久比駅前土地区画整理事業のしゅん工を記念して建造され

あぐいぶらり旅 施設かいわいを行く(阿久比交番)

たものだ。天にも昇るような勢いのモニュメントを横目に交番へと歩を進める。阿久比交番は平成十八年四月に半田消防署阿久比支署の北側から名鉄阿久比駅前に移転。交通安全や防犯などの拠点として、町民の安全や安心を担っている。交番内には二人のおまわりさんの姿が見える。怪しい者と間違われたいように、二人で歩いていることを説明。気さくに対応してくれて、ごくろうさまです。頑張ってください」と激励を受ける。「昔、怖い目に遭いそうになったことがあります。改札口を抜けたら、横着そうなお兄ちゃんが腰を下ろして、目を細めて僕のほうを見てるんですよ。」「へえー。それでどうしたの?」と私は興味津々で友人に尋ねる。「お兄ちゃんが急に立ち上がり、笑みを浮かべて手を振るんです。『えっ』と思い、後ろを見たら女の子が手を振ってました。」「よくある話じゃん。交番とどう関係がある

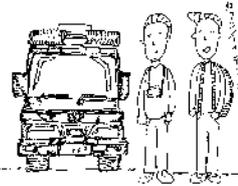


阿久比交番

の?」「今は交番があるから安心ですけど、駅前が変な意味でにぎやかだったころは、誰でも勘違いしたと思いますよ。」「なるほどね」。偶然にも中年の女性たちが「ここに交番が移ってきてよかったね」と話す声が聞こえてくる。おまわりさんたちはパトカーに乗り込み、パトロールへと出掛けて行く。交番を後にして、線路沿いを北に進み、オアシス大橋を歩く。田んぼの方から稲刈りを終えたばかりの独特な「おい」が風に乗って流れてくる。秋の日は釣瓶(つるべ)落とし、西空の夕焼けが消え、急に暗くなってきた。

シリーズ

阿久比を歩く 88



国際色豊かになった「菊花展」

菊薫る秋。役場前周辺では「みんなの菊花展」をはじめ多彩なイベントが行われ、多くの人々にぎわう。今回はイベントに立ち寄りながら、半田消防署阿久比支署周辺をぶらり歩くことにした。

消防署を訪れる前に菊花展会場に足を運ぶ。赤、白、黄色の丹精込めて作られた大輪の菊が、所狭しと地区ごとに並ぶ。

スリランカから、自動車部品の研

あぐいぶらり旅

施設かいわいのを行く(半田消防署阿久比支署)

修のため大府市に滞在しているという女性らに出会う。菊の花の感想を尋ねると、流ちょうな日本語で「とてもすばらしいですね」と言葉が返ってくる。国際色も豊かとなった菊の祭典。まさに「みんなの菊花展」だ。文化祭、フラワーフェスティバル in 阿久比を見てから、消防署に向かう。

消防署阿久比支署は昭和五十年二月に完成。「いざというときに」阿久比町民の生命や財産を守る消防車や救急車が七台備えられ、職員が三百六十五日、二十四時間体制で勤務する。日ごろからの訓練は欠かせない。私たちが訪れた際も、車庫の前で、消防士が柔軟運動を始めるところだった。

普段は入ることのできない部屋の中を見せてもらう。事務所、仮眠室、風呂場と順番に回る。男性だけの職場だが、どの部屋も整理整頓がきちんとなされている。

調理室では夜勤者の夕食を、毎日作るとのことだ。若手職員が自分た

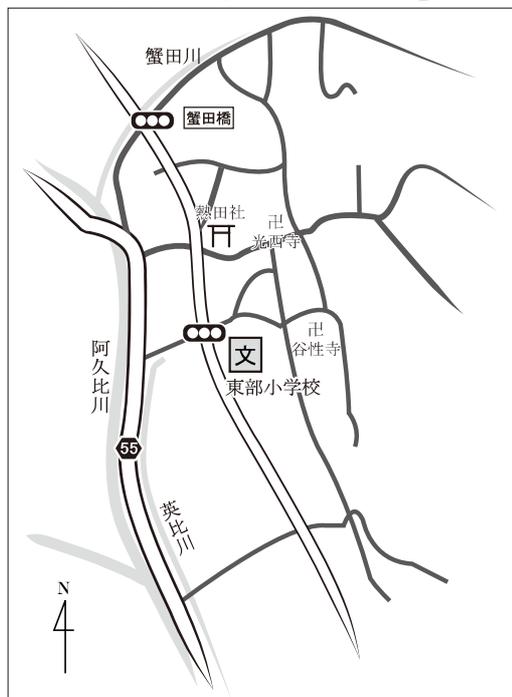
ちで献立を考えて料理の腕を振るう。一番の人気メニューは「カレーライス」らしい。私と友人は共に、大のカレー好き。一度ごちそうになりたものだ。

消防署を後にする。真剣な表情で友人は言う。小学生のころ、かつこいい消防車が好きで、消防士になリたかった時期があります。そんなこともあって町消防団で七年間頑張りました。「確かに、消防団で活躍していたときの君はすごく輝いていたね」と、私がほめ言葉を送るのにもかかわらず、気持ちは上の空。友人は健康まつり会場で行われていた、地上高三十一メートル伸びる「はしご車」の試乗に心が奪われていた。



はしご車試乗が行われた健康まつり会場

シリーズ 阿久比を歩く ⑧9



東部小学校のシンボルの木「メタセコイア」

東部小学校周辺をぶらり歩いた。暦の上では立冬も過ぎ、本格的な冬近し。空は鉛色。北風も冷たい。県道南粕谷半田線沿いの街路樹は、黄色や赤に色つき、落ち葉は風が吹くたびに舞い上がる。通学路では「子ども見守り隊」の腕章を付けた男性が下校時の児童たちに優しく声を掛ける。寒い中、子どもたちを見守る姿には頭が下がる。手をつなぎ友達と仲良く歌を歌いな

あぐいぶらり旅
施設かいわいを行く(東部小学校)

がら下校する子どもたちの姿は、実に無邪気でかわいらしい。小学校西側の正門から友人の母校に足を踏み入れる「懐かしいにおいがしますね」。友人の顔が緩む。「わが母校は、東門近くにそびえるクリスマスツリーに似た「メタセコイア」の木が自慢なんですよ。校舎の高さを追い越す勢いで伸び、二等辺三角形を成す形は見事だ。写真大会では卒業するまで、ずっとこの木を描き続けました」。どうして?。「校舎を描くのが難しかったからです」。えっ、それが理由なの……。

放課後の校庭では、児童たちが一輪車で作業を行っている。指導に当たると先生が何をしているか話してくれる。「学校の伝統で、卒業式の会場となる体育館に、全校児童が育てた花を飾ります。子どもたちは、きれいな花を咲かせるために自分たちの手で「一人一鉢の花」の土作りを実践しています。一輪車で運んでいるのは土や牛ふんですよ。毎年三月には

素晴らしい花が育ちますよ。寒さにも負けず、楽しそうに作業をするのは五年生。男の子に学校の自慢できる場所を尋ねてみる「ホタルを大切に育てていることと、メタセコイアの木です」。学校内にはホタルが観察できる場所「ホタルワールド」が設けられ、六月下旬には一般開放してホタル観賞会が開かれている。

「今日は何だか妙にうれしかったです。やっぱり母校はいいですね。僕と同じ自慢をしていた子は、将来有望ですね。楽しみです。♪なだらかな 丘のふもとに 平和のまちな 空がすむ・・♪」。久しぶりに友人十八番の東部小学校校歌を聞いた。相変わらず音は外れていた。

素晴らしい花が育ちますよ。寒さにも負けず、楽しそうに作業をするのは五年生。男の子に学校の自慢できる場所を尋ねてみる「ホタルを大切に育てていることと、メタセコイアの木です」。学校内にはホタルが観察できる場所「ホタルワールド」が設けられ、六月下旬には一般開放してホタル観賞会が開かれている。

素晴らしい花が育ちますよ。寒さにも負けず、楽しそうに作業をするのは五年生。男の子に学校の自慢できる場所を尋ねてみる「ホタルを大切に育てていることと、メタセコイアの木です」。学校内にはホタルが観察できる場所「ホタルワールド」が設けられ、六月下旬には一般開放してホタル観賞会が開かれている。



作業をする東部小学校児童

シリーズ

阿久比を歩く ⑨



校庭に育つヘチマ

英比小学校の児童が育てたヘチマが校庭を囲むフェンスの向こうに見える。はるか先で、かばんを背負った子どもたちが運動場に集まる。帰る方向が同じ低学年がグループを作って下校するための準備をしているようだ。先生の大きな声に促されて子どもたちが整列を始める。「遠くからだ、かばんが歩いているのか、子どもが歩いているのか分からないですね。あのくらいが一

施設かいわいを行く(英比小学校)



番がかわいいころじゃないですか」と友人が私に話し掛ける。「そうかもしれないな。小学校一年生の娘が『今年もサンタさん来てくれるかなあ』って、前歯の二本抜けた顔でしゃべる表情は、かわいいよ。」「サンタさんか。宝くじの三億円の当たり券がもらいたいなあ。」「君はかわくないね。」

英比小学校は、来年開校百周年を迎える。校歌の中で、阿久比の郷を開いたと言われる「英比鷹」が「その名もゆかし英比鷹」とうたわれ、「英比」の名を継ぐ学校だ。

校内に足を運ぶ。昨年新しく生まれ変わった体育館は、なだらかな曲線を描くアーチ型の屋根が印象的。館内から子どもたちの声やホイッスルの音が響く。

この学校では花壇作りに力を入れている。県教育委員会などが主催するFBC(フラワーブラボーコンクール)に毎年応募するなど、人目を楽しませてくれる美しい花壇を作り出す。季節がら土作りの準備で

花壇はシートに覆われている。来年はどういった花壇を演出してくれるのか今から楽しみだ。

体育館の前を通り、下校する子どもたちの後からついて行く。何やら騒がしくしていたので、話し掛けてみると、セミの抜け殻を見つけたらしい。大人なら見過ごしてしまう小さなことも、子どもたちにとっては大発見のようだ。

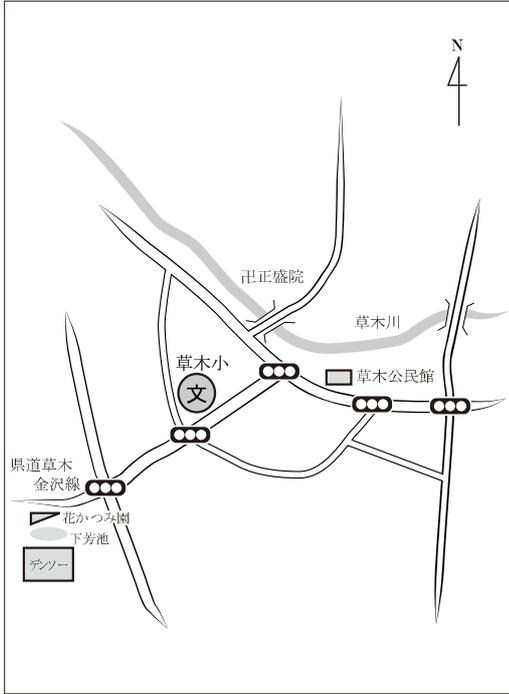
しばらく話をしながら一緒に歩く。「おじさんたちこの辺で帰るね」。福住新橋付近で別れを告げようとする。と、「あの橋まで、一緒に来てよ」と子どもたちに腕をつかまれる。気分を良くして福住橋まで歩く。

子どもたちがあどけない笑顔で「またね」と手を振ってくれる。あの子たちには、今年もきつとサンタクロースがプレゼントを届けにやってくるだろうと確信した。



元気な英比小児童

シリーズ 阿久比を歩く⑨



元気に遊ぶ草木小の子どもたち

小学校正門付近に小さな色とりどりの自転車が並ぶ。子どもの声が聞こえるので、学校の中に足を踏み入れる。個人懇談会のため、学校の授業は半日で終了。一度家に帰った子どもたちがまた学校に出掛け、校庭で楽しそうに遊ぶ。
おじさん二人がぶらぶらしているので、物珍しそうに子どもたちが私たちを眺める。話を聞こうと近づくと笑顔で「こんにちは」と元気よくあ

あぐいぶらり旅 施設かいわいを行く(草木小中学校)

いさつが響き、その場は歓迎ムードに変わる。

「うちの学校、大きなクスノキがあるから見てよ」。子どもたちに手を引かれる。案内された場所は「ゆめひろば」。正門から入ってすぐ右手にあり、「草木っ子」の憩いの場であるクスノキをはじめ、イチヨウやケヤキなどの木が茂る。ベンチも整備され、自然観察ができる空間となっている。

樹齢約二百年。クスノキは手で「ピース」の形を取るように二股に伸び、「くすじいさん」の愛称で呼ばれる。「すじい木だね」。私たちがほめると子どもたちの顔がほころぶ。多少傷みが目立ち、「しわ」が増えてきているようだ。草木っ子自慢のくすじいさんは、学校から巣立った多くの子どもたちを静かに見守り続けてきた。寒い日であったが、手がかざすとぬくもりが感じられた。

「次は飼育小屋に行こうよ」。手を引かれるままに飼育小屋へ向かう。「何か珍しい動物がいるの?」と友



「草木っ子のいこいの場「ゆめひろば」」

人が訪ねると「クスノキにウサギがいるよ」。子どもたちは友人を相手に、なかなかしゃれたことを言う。「クスノキにウサギ、クスノキにウサギ」リズムカルに口ずさみながら前に進む。

かわいいウサギを見て、子どもたちと別れる。学校周辺を歩く。二人で一年間を振り返った。「二〇〇八年を漢字一文字で表すと「控」かなあ。厄年でいろいろなことを控えたよ」。「僕は独身生活を卒業して、これまでにない素晴らしい年だったので「結」ですね」。「体力が続く限り、「ぶらり旅」二〇〇九年も続けるからね」。「Yes we can!」。二人で気を引き締めた。

シリーズ

阿久比を歩く ⑨



ネットに上り遊ぶ女の子たち

二〇〇九年のぶらり旅を開始。今年最初は南部小学校周辺からスタートを切る。
小学校はまだ冬休み。誰もいないかと思いきや、子どもたちが東の校門から学校へ入っていくのが見える。正月も早や五日を過ぎ、家で遊ぶのもそろそろ飽きるころ。子どもたちも学校で思いっきり、走り回りたくなつたにちがいない。
運動場で遊ぶのは五年生。男の子

施設かいわいを行く(南部小学校)

あぐいぶらり旅

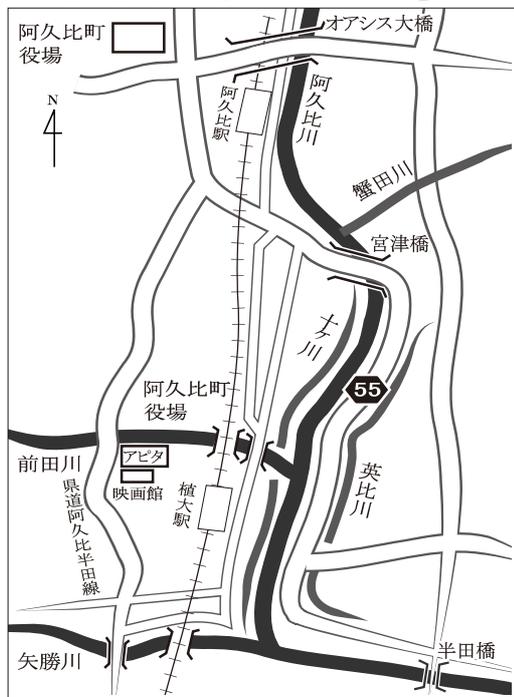
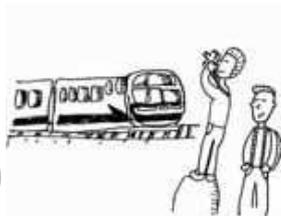
はサッカーボールをけり、女の子は遊具で遊ぶ。
「うちの学校はサッカーゴールの数が阿久比で一番多いよ」と男の子が得意げに話す。数えてみると六つ。言われてみるまで分からなかったが確かに多い。
少年たちに「将来の夢は」と尋ねると、四人中三人が「サッカー選手」。サッカー選手を夢見る子どもたちは、力強くゴール目掛けてシュートを放つ。けつた後に体が宙に浮く姿は、かっこいい。話を聞けば、正月も学校に来てボールをけつていたと言う。サッカーゴールが多い恵まれた環境。何本も何本もシュートの練習をして、世界で活躍できるプレイヤーに成長してもらいたい。
運動場西の遊具で遊ぶ女の子たちも元気がいい。ロープで組まれた遊具に駆け上り、高い場所から私たちに、大きなクスノキを指差して「おじさん、あそこトリの巣があるよ」と教えてくれる。トリの姿は確認できなかつたが、子どもたちにとつて

は自慢の「トリの巣」のようだ。「あの岩石園の岩の中には「化石」があるんだよ。それからね……」。学校の中を紹介してくれる子供たちの話は尽きない。
校門を出て、学校の周りを歩く。年末年始の暴飲暴食で、私も友人も動きが鈍い。「今年は急がず、ゆっくり「牛歩」で進みましょうよ」「君、新年早々丑年にちなみ、うまいこと言うじゃない」「そうですか。僕に届いた年賀状に似たような言葉が書いてあったので、パクッて言ってみました」と友人が頭をかく。「新年だから、得意の句でも一首詠んでみたら」。「へ……こめんなさい。今年は何も浮かびません」。「それなら僕が一つへ丑年も モーレッツに歩むぶらり旅(字余り)」。



サッカーを楽しむ男の子たち

シリーズ 阿久比を歩く ⑨③



名鉄河和線の線路

今回から新シリーズ「鉄道沿線を歩く」を連載します。
町内を南北に名鉄河和線の線路が走る。鉄道の沿線を阿久比町の南から北の端まで歩くことにした。
南端までは電車で行くことに決め、阿久比駅から半田口までの切符を購入。昨年の十二月二十七日から阿久比駅に特急電車が止まる。時刻表には停車時刻が記されている。時計を見ると、間もなく特急電車停車の時

鉄道沿線歩き⑦

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

刻。早速改札口を抜け、ホームへ急ぐ。

階段を上り切ったところで特急電車がちょうど到着。私も友人も初めて特急電車停車場面を見る。「……」。ありふれた日常に変化が起きた瞬間、何とも言えぬ感動を覚える。特急電車を見送った後、ホームで待っていた普通電車に乗り、半田口へ向かう。

駅を降り、県道阿久比半田線を北上して矢勝川沿いを歩く。川の上に乗かる踏切にたどり着き、この地点から鉄道沿線の「ぶらり旅」をスタート。

鉄道沿線と言っても、常に線路に沿って道はない。線路が見える範囲で道を探し、北端を目指す。英比川と線路に挟まれた農道を歩く。線路沿いの土手は、薄茶色の枯れ掛けた雑草が冷たい風にさらされる。

植大駅を通過。西側には映画館とアピタ阿久比店が見える。繊維工業が盛んに行われていた時代、店舗が建っている場所は紡績工場であって



阿久比駅に停車する特急電車

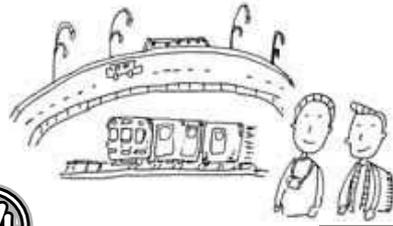
いた。当時貯水タンクだったものを、映画館の名前を書いてオブジェとして使うのは、この場所に工場があったメモリアルにするためだと聞く。電車が通過するときに、友人が乗客に手を振る。反応は鈍い「デイズニールランド内を走る列車に手を振ると、みんなが笑顔で応えてくれますけどね……」と友人がぶつぶつ言うので先を急ぐ。

あせ道や農道を歩き渡り、スタートして約一時間後、阿久比駅に到着。特急電車停車記念に写真を撮ろうと駅前公園で電車が来るのを待つ。公園で遊ぶ親子が寄ってきた。珍しい電車が走りますか」と父親に尋ねられ、事情を説明。「この場所ですってちゃん」が写真を撮っているのをよく見掛けるもんですから」と言葉を残して親子は離れていく。

写真を撮った後、「ってっちゃんって誰？」と私が友人に聞くと、「世間では、鉄道マニアの人たちのことを「鉄っちゃん」と呼んでますよ」と、そんな焼肉みたいな名前初めて聞いたよ」と言って友人を笑わせた。

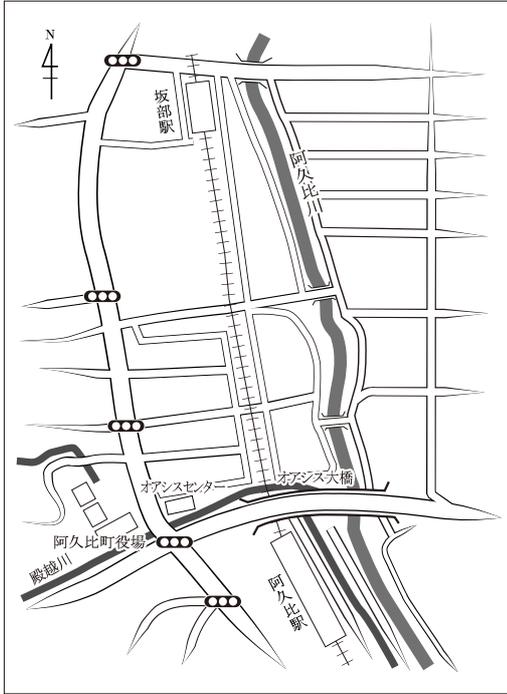
シリーズ

阿久比を歩く ⑨④



あぐいぶらり旅

鉄道沿線を歩く ②



目の高さの位置に見える線路

前回は南端からスタートを切り、阿久比駅まで歩いたので、駅から北上を続ける。駅前周辺を歩く。阿久比駅は昭和五十八年七月に開業。毎日通勤、通学などで多くの方が利用する。平成十八年四月には阿久比交番も駅前に移転し、この辺りは町の中心街として華やかさを増す。今日は休日、電車に乗ってどこかへ行くのだろう。笑顔いっぱい親

子とすれ違う。夕方に戻って来るときは、お父さんがあの子をおんぶしてると思うよ。大変だけど、その温もりを感じる瞬間がたまらないよ」と私が話し掛ける横で友人が軽くうなづく。

正面にオアシス大橋が曲線美しくアーチを掛ける。平成元年十一月町の東西を結ぶ「夢の架け橋」として完成し、開通式には三笠宮寛仁親王、同妃信子殿下を招き、盛大に開通式が行われた。

「今まで黙ってましたけど、実は中学一年生のとき開通式に参加したんですよ。橋の上でベートーベンの『第九』をドイツ語で歌いました。まだ声変わりもししていない少年で、テノール担当でした」

友人がオアシス大橋の思い出を語る。町の歴史が変わる瞬間に友人が立ち会っていた衝撃的な事実を聞く。友人が目を閉じて『第九』を歌い始める。「~~~~~」。相変わらずだ。まだテノールが担当できそうな甲高い歌声。少年時代に戻ったかのよう



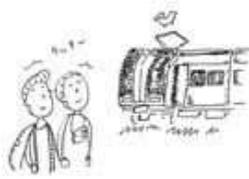
田園の間を走り抜ける電車

に堂々と歌い上げる彼に脱帽。橋の下を抜け、しばらく歩く。後方から電車の近づく音が聞こえる。後ろを振り返る。オアシス大橋、阿久比川の堤防、広がる田園、電車が重なり合う場面は絵になる。素晴らしい光景を目に焼き付ける。

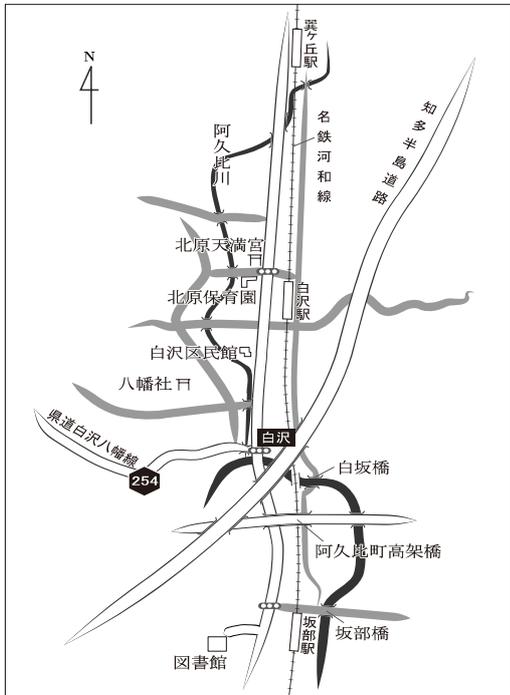
坂部駅が見えてきた。たわいもない会話を続ける。前方から電車がやってきた。左手、目の高さの位置に線路がある。地面の揺れが体全体に伝わってくる。電車が私たちの横を通過した瞬間、すごい風圧と音で会話が吹き消されてしまう。「~~~~~」。

電車が過ぎ去った後、「君、今どさくさに紛れてへんなこと言わなかつた?」「別に何も言ってませんよ」。友人の含みのある笑みが気になった。

シリーズ 阿久比を歩く ⑨5



あぐいぶらり旅 鉄道沿線を歩く ③



枯れ草の間から顔を出すセイヨウタンポポ

坂部駅からさらに北上を続ける。今日は二月十四日、世間ではバレンタインデー。私はこの日にあまりときめかなくなつた。「こんな日に僕と二人で大丈夫?」「ええ。大丈夫です。なんとなく友人に落ち着きがない。」
昨日の雨も上がった。風は少し強いが、日差しは春の陽気。今の時期、例年ならもう少し寒い日が続いているはずだがとても暖かい。畑に植え

られた梅の木にかわいらしく花が咲く。ほとんどのつぼみに色が付き、満開になる日も近い。
田んぼにハトが群れを成す。どのハトも同じ動きで、首を動かし、くちばしで土の中を突つつく。電車が通つても飛び立とうとしない。
「電車の音にも気が付かないくらい、夢中でえさを探しているのかなあ。」私の問い掛けに「冬の間は食べ物がないので腹ペコなんです。平和の象徴のハトですから手を出せば寄つて来ますよ」と友人が近づいた瞬間、ハトたちは一斉に空へ飛び上がる。ハトたちの邪魔をしまつたようだ。
前方に西尾知多線が東西に伸びる。高架橋に差し掛かり、真つすぐ通り抜けできないので、進行方向右手に流れる阿久比川沿いに出る。
川の流れと逆方向に歩を進め、知多半島道路をくぐり、再び細い道を線路と平行に歩く。土手でセイヨウタンポポを見つける。枯れた雑草の間から茎が伸び、鮮やかな黄色い花



目の前を通過する電車

が咲く。所々で春の息吹を感じる。
白沢駅近くで、南へ向かう黒いボデいの電車とすれ違つた。「あの電車が」とセントレア行きですよ」と友人が言うので「それは違うなあ」と私は返す。なぜなら名鉄河和線で南に向かう電車は、絶対にセントレアには行かないからだ。危うく友人の思いつきの言葉を信じてところだつた。
鉄道の沿線を阿久比町の南から北の端までを歩く「ぶらり旅」もゴールが見えてきた。間もなく巽ヶ丘駅。「今思つたんですが、線路はチヨコレイト色ですよね。」「君、かなりバレンタインデーを意識しているね。ここで終わりだから早く帰つたら。」「もうそんな年じゃないですよ(笑)。目を合わせないで話す友人が気になつた。」